

## 共生教育を考える ～ 各専門分野からの多角的考察 ～

## What is Co-existence in Education? Multifaceted Consideration from Each Specialized Field

科目提供大学名	関西学院大学
担当教員 (講義順)	教育学部 教育学科 (7名) 【代表】 眞城 知己 (教授)・岡本 哲雄 (教授)・原田 大介 (教授) 藤井 恭子 (教授)・宮本 健市郎 (教授)・岩坂 二規 (准教授) 波江 彰彦 (准教授)
単位数	2 単位
最大授業定員	40 名
開講学期	前期 1 時限 (10:50～12:20)、2 時限 (13:20～14:50) 1 日 2 講時 土曜日 (4月27日～6月22日、5月4日の休日は休み)、初回は 1 時限
成績評価	毎回の授業でミニレポートを提出してもらい、その合計点をもとに評価する。
テキスト	特になし
参考文献	授業中に指示
授業以外の学習方法	授業中に指示された参考文献や資料などを使用して学習して下さい。
その他の特記事項	授業開始後 20 分以上の遅刻、および早退は認めません。
講義概要	多様性を包む社会を構築していくための「共生」。本講座では、教育学部の教員が「共生教育」を共通テーマに多角的に話題提供します。教育哲学、インクルーシブ教育・特別ニーズ教育、多様性を包含する国語科授業、青年期心理、アメリカ学校史、多文化共生、地域再生をトピックスに、問題の本質をいかにとらえ、解決の模索をいかにおこなうかを概説します。
到達目標	共生教育に関わり、いかに現象をとらえ、課題解決を模索しようとするのか、そのために何を学ぶことが必要なのかを説明できるようになることを学習目標とします。
授業計画・内容	1. 共生教育を考える (眞城・岡本) 2・3. 「共生教育」を考えるスタンス (岡本) －「共生」への問いから、教育の意味を再発見するために－ 4・5. 特別な教育的ニーズ概念を用いた多様性を包含する (眞城) インクルーシブ教育の理解 6・7. 共生や多様性の観点からみた国語の授業の可能性 (原田) － 小学校の国語の教科書は、どうあるべきか － 8・9. 共生社会のための青年教育としての対話 (藤井) － ジェンダー問題との対峙 － 10・11. 自然と人間の共生 (宮本) (1) アメリカにおける自然学習の起源 (2) 自然学習の消滅 12・13. 多文化共生と多様性トレーニング (岩坂) － "ちがいのちがい" を考える － 14・15. 地域と共生し、持続可能な地域をつくるための教育 (波江) － 隠岐地域を例に－

## 「共生教育を考える～各専門分野からの多角的考察～」(講義順)



【代表】眞城 知己(教育学部 教育学科 教授)

1. 筑波大学大学院博士課程心身障害学研究科中退。博士(教育学)。兵庫教育大学助手、大阪教育大学講師、イギリスマンチェスター大学客員研究員、デンマーク教育大学客員研究員、千葉大学教授を経て2017年度より関西学院大学教授。専門は特別な教育的ニーズ論。
2. 大学2年生の頃に、同じ内容を提供しても障害のある子どもに対する際には「障害児教育」、別の子どもに対するときには「通常教育」との使い分けに疑問を感じて、当時イギリスで教育制度に取り込まれたばかりの「特別な教育的ニーズ」概念の勉強を始めました。この概念は、後に国連でのインクルーシブ教育の推進のための考え方にもつながっていき現在に至っていますが、動的な性質故になかなか正確に理解されない用語です。この用語に至る背景を探るべく、19世紀にイギリスの基礎教育制度が成立した当時まで遡って歴史研究のアプローチを用いて検討したり、動的な概念を制度に導入した際に必然的に生じる混乱をイギリスでどのように克服してきたのかを教育制度研究として掘り下げるなど、様々な角度から「特別な教育的ニーズ」の概念の検討を続けています。
3. 用語はよく聞いたことがあるものの、様々に都合良く使われてしまっている「インクルーシブ教育」の考え方の本質や、それと特別な教育的ニーズ概念との関係などについて講義で解説します。難しい概念ほど誤解されやすいものですが、その状態を放置すると子どもたちが不利益を被ります。受講生の皆さんが様々な場で「多様性を包含する」ための行動の軸となる考え方を身につけられるようにしたいと考えています。
4. 説明を一度聞いて理解できる程度の内容は浅く表面的なものです。「わかりやすさ」だけを追究すると、どんどんそうした表層的な理解しかできなくなってしまいます。難解に感じることを何度も思考の反芻をして少しずつ理解を深める感覚を大切になさってください。



岡本 哲雄(教育学部 教育学科 教授)

1. 専門分野は、教育人間学です。教育学は多様な専門領域が混在する学問ですが、それぞれに研究方法も異なります。私は、人文学的なアプローチで「子どもと共に生きる」ことの意味を現代というニヒリズムにおいて考え直す仕事をしています。「自分が存在する」「この世界が存在する」ってどういうこと?—この不思議を最も大切なことと考へ、「生きる意味」の問いに引き付けて、人間形成や教育を語り直すことを試んでいます。
2. 思春・青年期に自己の在り処を求めて彷徨う中で、人間の在り方、人間を超えたもの、自己が自己になること、他者とは、といったことを考えるようになりました。最初は、深層心理学や宗教哲学に憧れていましたが、京都学派哲学の影響下にあつて人間と教育を考える精神的土壌で教育人間学の研究者としての修業を始めることになりました。「生きることに寄り添う」という課題は教育の中核にあつて問われ続けるべき問いでなければならないと思っています。
3. 現代の様々な領域で「共生」が課題とされているのは、不確実な時代状況の中で「共に生きること」の当たり前さが失われているからです。ですから「共生は大切なことなので、それをどのように教育するか」という視点に立つだけでは不十分です。むしろ多角的に「共生とは何か」を問うことによって、受講者の皆さんが、次代に〈いのち〉を継承する「教育という営み」の意味を新たに発見することに繋がればと願っています。
4. 各専門分野の視点から多角的に「共生教育とは何か」という問いにアプローチする視点を提供します。それらを受けとめるためにも、受講者各自が、講義をきっかけとして、自分自身の問題として「共生」ないし「共生教育」を問い続けるという姿勢が大切です。定まった答えが用意されているわけではありません。共に考えていきましょう。



原田 大介（教育学部 教育学科 教授）

1. 広島大学大学院教育学研究科で博士号（教育学）を取得しました。専門は、国語科教育です。特に、小学校の国語の授業に焦点を当てて研究を進めています。
2. 私の研究テーマは、「多様性と向き合うことばの力を児童に育てるために、小学校の国語科教育はどう変わればよいのか」というものです。国語の授業や教科書のあり方を批判的（critical）に考えることは、目の前にいる子どもたちだけでなく、幼少期の自分自身と向き合うことになります。研究の進展とともに自分の凝り固まった価値観も変容していくところに、この研究の魅力を感じています。
3. 実際に小学校の国語の教科書に触れていただき、共生や多様性の観点からみた国語の授業の可能性と課題を考えていただけます。
4. 共生教育とは？多様性と向き合うとは？ことばを学ぶとは？ 教育をめぐる問題は子どもたちに限られたものではなく、今を生きる私たちすべての問題です。よりよい国語科教育のあり方について、当事者の立場で考えてみましょう。



藤井 恭子（教育学部 教育学科 教授）

1. 筑波大学大学院心理学研究科修了。博士（心理学）。臨床心理士。思春期・青年期に軸足を置いて、人間の生涯発達心理学と学校心理学を研究してきました。とくに、ヤマアラシ・ジレンマという現代青年特有の友人関係とアイデンティティの様相についての研究を行ってきましたが、現在は青年期における「共生教育」としてのジェンダー問題、対話による青年教育 (Dialogue for Adolescence) をテーマとして研究と教育実践活動を進めています。
2. 自分を定義づけ、自身の生き方を決めるという危機を経験する青年期は、他の発達段階とは異なる重さと彩りを持っています。大学院で出会った「青年心理学」という学問と師匠は、当時の私の浮草のような不安感をありのまま受け止め、人生の道標を与えてくれました。
3. 講義は、可能な限り対話形式で行います。どんな意見にも正解も不正解もありません。お互いの意見を交わし、その中で生まれる葛藤から新たな視座を得られるように望んでいます。
4. ジェンダーは、実は青年期のアイデンティティに直結する重要なテーマです。日本のジェンダー問題はその多くが無意識のうちに受け入れられ、教育現場でも再生産されてしまっています。ぜひ問題意識をもって、誰もが生きやすい社会を目指してほしいと願っています。



宮本 健市郎（教育学部 教育学科 教授）

1. 東京大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学。博士（教育学、京都大学）。兵庫教育大学助教授、神戸女子大学教授を経て、2009年から関西学院大学教育学部教授。
2. 大学生のころから、ヒトが一人前の人間になることの意味について考えるようになりました。人間へのなりかたは、西洋と日本では大きく異なっています。その違いに興味をもっています。
3. 自然と人間の関係の変化を見ます。自然は克服すべきものか、そのまま保存すべきものか。20世紀初頭のアメリカにおける自然観の転換を見ながら、考えます。
4. オリジナルの史料を自分のちからで読む練習をしてください。そうすれば、現代の課題が、過去の課題とつながっていることに驚くことでしょう。



岩坂 二規 (教育学部 教育学科 准教授)

1. 人権教育研究室副室長。同志社大学アメリカ研究科後期課程単位取得退学。研究テーマは、グローバル・シティズンシップ教育の可能性を開発、人権、平和、環境等の鍵概念をもとに学際的視座から探究すること。
2. 高校生の頃、世界中の若者が1週間大自然の中で学び合う「World Camp」というプログラムに参加したことが、その後の進路と研究的関心への原点になりました。グローバル・シティズンシップ教育は、誰も答えを知らない問いや課題について互いに学び合い探究する「未来に向けた教育」です。教える－教えられるという固定された関係から自由な、本来の学びを創る取り組みであると思います。
3. 多文化共生と多文化共生教育について、概念の背景、現状と課題、実践例からの学びなどを、講義とワーク、アクティビティを通して学びます。言葉の定義にとらわれず、自分にとっての多様性理解の幅を広げるダイバーシティ・トレーニングの機会と位置付けて授業を行います。
4. 「世界」と「わたし」の多文化性・多様性に触れて、みんなにとってのwell-beingを一緒に考えましょう。



波江 彰彦 (教育学部 教育学科 准教授)

1. 福井県福井市出身。大阪大学文学部・大学院文学研究科にて人文地理学教室に所属して廃棄物(ごみ)に関する研究などを行っていました。その後、同教室の助教やいくつかの大学の非常勤講師などを経て、2017年に関西学院大学教育学部に着任しました。本講義で取り上げる予定の隠岐地域には2015年3月に初めて訪問し、現在までにおそらく40回ぐらい訪問しています。
2. 人文地理学を「選んだ」という感覚はあまりありません。ごみの研究や隠岐地域での調査研究、最近は環境教育やPBL(Project/Problem Based Learning)の開発・実践などにも関心を持っていますが、いずれも「おもしろいからやっている」という素朴な理由です。やはり「人と地域・環境とのかかわり」が魅力のひとつでしょうか。
3. オムニバス講義なのでどうなるかわかりませんが、一方的な講義ではおもしろくないので、ディスカッションなども取り入れて受講者のみなさんが主体的に学び考える講義にしたいと考えています。この原稿を作成している時点では、「地域が持続可能であるために、教育には何ができるのか」「そうした地域で共に生きるとはどういうことか」といったことを講義を通して一緒に考えたいと思います。
4. 隠岐に限らず離島地域や過疎地域に関心のある方の受講をお待ちしています。地域の持続可能性や再活性化について、一緒に考えましょう。